

## 地域組織活動の活性化に関する一考察 —愛育班活動のアセスメントの試み—

母子保健研究部 斉藤進  
嘱託研究員 森川洋（東海女子短期大学）

### 要 約

地域組織活動のリーダー行動尺度（SO式LSHP）および活動成果指標尺度を使用して、愛育班活動のアセスメントを試み、尺度の有用性の検討と活動の活性化要因の析出を目的とした。研究は、平成19年に3回コースで実施された愛育班研修会のワークショップでの観察と参加者の2つの尺度の得点をもとに、既存データとの比較と研修担当者との討議により検討を行った。

その結果、既存データに比べ有意な差が確認され、尺度得点と活動実態との関係性が推測できるなど、活動アセスメントに使用可能性が高いことが明らかとなった。活性化要因については、年度ごとに定例の基礎研修会の開催および役員の引き継ぎ、並びに担当者の分班長会議等への関わり方が重要であることが示唆された。

キーワード：リーダー行動、SO式LSHP、活動成果指標、愛育班、アセスメント

### A Discussion of Vitalizing Community Organizations —An AIKU-HAN Activities Assessment Approach—

Susumu SAITO, Hiroshi MORIKAWA

#### [Abstract]

Using an activity community organization leader activity scale (SO type LHSP) and an evaluation indicator scale, this study aimed to perform an assessment of AIKU-HAN activities and consider the efficacy of the scales and determining factors in vitalizing activities. In the research, previous data was compared with scores of two observation and participant scales obtained from three workshops courses held in 2007 by the AIKU-HAN training committee, and discussions were held with training staff.

The results showed a significant difference compared to previous data, and the high likelihood of being able perform activities assessments based on the relationship between scale score and state of activity. As factors for vitalization, the importance of holding regular annual basic training events, handing over duties between incoming and outgoing administrators, and holding team leader meetings was suggested.

**Keywords** : leader activities, SO type LSHP, activity evaluation indicators, AIKU-HAN, assessment

## I. 目的

地域組織活動の支援にあたって、その活動実態と課題を把握することは重要である。愛育班の研修会において、筆者らが開発した「地域組織活動のリーダー行動尺度」(以下、SO式LSHP)<sup>1-3)</sup>、「活動成果指標尺度」<sup>4)</sup>を用いて活動のアセスメントを試み、尺度の有用性の検討と活動の活性化要因を析出することを目的とした。

## II. 方法および対象

活動実態と問題点については、東京近郊のA市において平成19年1月から2月に3回コースで開催された愛育班研修会(表1)の運営に参加し、グループワークの参与観察と担当者間の討議により検討してまとめた。

リーダー行動への期待像については、SO式LSHPを用いて、1回目の研修会において口頭で説明した後、項目を読み上げ、参加者が回答を記入し、回収した。回答は無記名で、尺度項目と経験年数、役職のみとした。また、活動成果も、1回目と同様に2回目の研修参加者に対して活動成果指標尺度を用いて実施した。尺度の項目は表2、3に示した。

参加者は、愛育班員と分班長、班長で、活動経験年数は、1回目平均11.3年(SD 8.9)、2回目11.8年(SD 8.0)と、経験年数はまちまちであった。

SO式LSHPと活動成果指標尺度は、集計後平均点を算出し、報告されている参考データ<sup>1-4)</sup>と比較検討した。なお、活動成果指標尺度の検定は、今回の調査項目数と検定可能なデータの項目数が異なるため、項目数を調整したデータを使用した。平均値の差の検定(キーボードによる独立した2群のt検定)にはHALBAU7を用いた。これらのデータをもとに活動実態と活動の課題を担当者および研究者間で検討し、尺度の有用性と活性化要因の析出を行った。

## III. 結果

### 1. グループワークの参与観察から

第1回目のグループワークでは、グループごとにブレインストーミングによる活動上の問題や困難点の収集を行った。第2回目は、前回の記録をもとに問題点を整理し、優先順位を決め、上位3位まで報告して終了した。このグループワークで参加者から出された活動の問題点は、①班員のなり手が減少しているなどの組織構造上の問題、②活動する班員の固定化や訪問カードの未提出、地域住民の理解などの活動上の問題等であった(表4)。

これらの整理された問題点から、運営者が次のグループワークのテーマを検討し、①班員のなり手がいない、②訪問カードが出せない、③地域の人に理解されない、④活動する班員が固定的となる、の4つを選定した(表

5)。第3回目には、グループワークのグループごとに解決策を検討し、記録をまとめた。

この3回のグループワークを観察したところ、私語と討議の逸脱が多く、話し合いが十分できない、記録がまとめられないなど、話し合いに不慣れであることがわかった。このため①分班長会議の未開催、②会議運営の問題があると推察されたため、市担当者に確認したところ、地区により異なるが、地区担当が出席しないところなど不十分な関わりであることが明らかとなった。

また、地域の理解や訪問などの活動の問題に関しては、各地区の活動の情報交換が行われていなかったことや役員とメンバーやメンバー間で活動の意義や目的などの共通認識が低く、差が大きいことがわかった。また、訪問カード提出の意味の理解不足や共通認識不足は、年度当初の基礎研修(基本的な目的、活動内容、方法等)が実施されていないためではないかと推察された。経験年数のある班員でも十分ではなかったことから、研修の実施体制に課題があることが確認された。

以上のことから、活動全般に行政からのトップダウン的な活動が多く、地域のニーズを掘り起こすための活動がないため、形骸化した活動になり、地域住民の理解が得られにくく、新しい班員や役員のなり手の不足などの問題が起きている推測された。

### 2. 期待するリーダー行動

SO式LSHPによるリーダー行動の得点は、表6に示したように、TI(トレーニングと指導)2.870点(SD 1.689)、DB(民主的行動)3.217点(SD 1.413)、AB(権威的行動)0.500点(SD 0.745)、SS(社会的援助)3.500点(SD 1.264)、PF(フィードバック)4.283点(SD 1.346)であった。

食生活改善推進員(1998)および保健協力員(1996)、愛育班員(1991)と比較すると、得点のパターン傾向は類似していたが、TIの得点が他に比べ有意に低く( $p > .001$ )、また、DBについても、食生活改善推進員( $p > .01$ )と愛育班員( $p > .001$ )とに有意に低くなっていた(図1)。

### 3. 活動成果指標尺度

活動成果尺度の平均得点は表7に示したが、「人とのつながり」4.143点(SD 1.156)、「地域社会への貢献」3.196点(SD 1.529)、「運営の活性化」0.893点(SD 0.958)、「健康行動」3.107点(SD 1.578)、「専門職・行政との関係」0.786点(SD 0.977)で、活動成果指標作成時のデータ<sup>4)</sup>から5点満点に換算したデータと比較すると、すべての指標で高い傾向が見られた(図2)。

詳細な比較を行うため、今回の平均得点と活動成果指標作成時のデータと共通している下位尺度項目のみによる差の検定を行ったところ、「専門職・行政との関係」を除く「人とのつながり」( $p > .001$ )、「地域社会への貢献」

( $p > .001$ )、「健康行動」( $p > .05$ )、「運営の活性化」( $p > .01$ )において平均得点が高く、有意な差が認められた(表8)。

#### IV. 考察

##### 1. 期待するリーダー行動と活動との関係

期待するリーダー行動の5次元<sup>2,3)</sup>のうち、「受動的な活動を積極的な活動へ導くために、その活動方法や技術を学習させ、また指導すること。メンバー間のつながりを明確にし、組織内の調整をし、円滑な運営をすることで活動の効率化を目的としたリーダー行動」であるTI(トレーニングと指導)において、食生活改善推進員や保健協力員など他形態の組織のほか「愛育班(1991)」についても有意に低くなっていた。また「メンバー一人一人の悩みや組織の雰囲気について積極的に注意を払い、メンバーと打ち解けた関係を持つように努めるリーダー行動」であるSS(社会的援助)や「一人一人のメンバーのよい活動や努力を認め、メンバーに対してその功績を認め誉めることによって、メンバーの動機づけ(やる気)を強化するリーダー行動」であるPF(フィードバック)は、他の組織と同様に高い値を示していたが、「意志決定に際し独断的で、リーダー個人の権威を強調するリーダー行動」であるAB(権威的行動)において低い傾向を示していることから、活動の形骸化やメンバーの活動意欲低下などが推測される。

DB(民主的行動)は、「組織活動の目標、活動方法、運営方針等についての意志決定に関し、多くのメンバーに広く意見を認めるリーダー行動」であるが、「保健協力員」との差が見られなかったことから、活動が行政やリーダーからの一方的指示によって行われていると推測される。また、愛育班の特徴といわれている分班長会議、班員会議が実施されていないことも大きく影響していると思われる。

##### 2. 活動成果指標尺度と活動との関係

活動成果指標尺度得点が、尺度作成時のデータ<sup>4)</sup>に比べて有意に高い傾向を示し、「人とのつながり」、「健康行動」では高得点であった。従って、活動することの効果はあったと考えられる。また、平均活動経験年数約11年を踏まえて検討すると、継続的に活動してきた効果であると思われる。

しかし、「運営の活性化」(運営が難しかった等)と「専門職・行政との関係」(行政の援助が得られなかった等)の得点が低いということは、「話し合い」を含め活動内容や育成者(行政・専門職)との関係に問題があると推測される。参与観察から活動の形骸化が指摘されていたことから考えると、活動内容の見直しが必要である。

この点を市の担当者に確認すると、例年通りの事業計画の繰り返しであること、支援する保健師等との関係性

が薄いことなどが指摘されたため、今後の育成者の関わり方が大きな課題であることが示唆された。

活動内容の検討については、分班長会議などの話し合いの場の活用が重要で、その場に保健師等が育成する立場で関与することが大切である。

##### 3. 活動の活性化方針

形骸化した活動の見直しのためには、分班長会議への参加など、保健師の関わり方が重要となる。従って、定例化された分班長会議に参加し、「話し合い」の方向付けや活動内容の検討などへの助言を積極的に行う必要性があると考えられる。また、新規班員(メンバー)が活動や会議に参加しやすい雰囲気づくりも大切な点である。

歴史ある組織の活動では、形骸化された活動のほかに、行政の支援者が全く関与しないで活動している傾向も見受けられるが、組織の発展にあわせた関与が必要である。特に、活動に必要な原理、原則などの基本的な研修は、毎年、行政と共催で行うことも大切である。活動の活性化を図るためには、役員はじめメンバーの交代は必須であるので、引き継ぎと年度初めの基礎研修<sup>5)</sup>は、必ず実施すべきであるといえる。

#### V. 結論

研修会の状況とSO式LSHPによるリーダー行動、活動成果指標尺度を使用した得点状況から、活動のアセスメントを試みた。使用した両尺度については、全体の得点傾向は類似しており、活動組織の形態や活動歴などにより、得点差が発現していると考えられることから、今後より多くのデータを蓄積していくことで、アセスメントや評価指標として使用できる可能性が高いと思われる。

本研究では、活動状況についての情報は、研修会での観察と担当者との討議をもとにまとめたが、調査票等を用いて行えば、より効率的なアセスメントが可能であろう。

謝辞：研修運営に関わる機会をいただいた行政担当者、研修の参加者の皆様に感謝します。

#### 【文献】

- 1) 島内憲夫、小山修、齊藤進、小野田薫、市村久美子、「母子保健のための地域組織活動の活性化と強化に関する研究—その3.地域組織活動の強化法の開発—」、厚生省心身障害研究「高齢化社会を迎えるに当たっての母子保健事業策定に関する研究」平成3年度研究報告書(主任研究者 平山宗宏)、1992、pp.449-486
- 2) 齊藤進、地域組織活動におけるリーダーシップに関する研究(1)、日本総合愛育研究所紀要 第33集、1997、pp290-293

- |   |   |
|---|---|
| <p>3) 齊藤進、地域組織活動におけるリーダーシップに関する研究(2)、日本子ども家庭総合研究所紀要 第35集、1999、pp233-238</p> <p>4) 齊藤進他、地域組織活動の評価法に関する研究(3)、日本</p> | <p>子ども家庭総合研究所紀要 第42集、1999、pp127-145</p> <p>5) 齊藤進、「地域組織活動をどう強化・活性化させるか」、生活教育 45(8)、2001、pp27-31</p> |
|---|---|

**表1 愛育班研修会日程**

---

1回目 (H19.1.23 13:30~15:30)	
講義	「地区組織活動について」(30分)
グループワーク	「活動にあたっての困難点や問題点」(90分)
2回目 (H19.2.9 13:30~15:30)	
講義	「愛育班活動の基本」(30分)
グループワーク	「活動にあたっての困難点や問題点の整理」(90分)
3回目 (H19.2.20 13:30~15:30)	
講義	「国民保険の医療費について」(30分)
グループワーク	「活動上の問題点の解決方法について」(90分)

---

※ 研修の運営は愛育班活動全般を担当する市の保健師と研究者(齊藤)が担当した。

**表2 S0式LSHPの5次元の項目**

- 
- トレーニングと指導 (TI)
    1. すべてのメンバーが能力を十分発揮できるように心がける
    6. メンバーの各々に地域での活動や役割について説明できる
    11. 活動方法と技術をメンバーに指導できる
    16. メンバーの長所や欠点を適切に指導できる
    21. 個人個人の努力がうまくかみあうように配慮できる
  - 民主的行動 (DB)
    2. 重要なことは実行する前にメンバーの承認を求める
    7. 地域活動の意志決定にメンバーも参加させる
    12. 活動方法について提案するようにメンバーにすすめる
    17. 活動目標はメンバーの合意のもとに決めさせる
    22. メンバーに自主的な活動を促す
  - 権威的行動 (AB)
    3. メンバーや関係者と相談せずに指導する
    8. 自分のすることをいちいち説明しない
    13. 何事も妥協しないことが多い
    18. メンバーから距離を置き、毅然としている
    23. 反論を許さないような態度で話す
  - 社会的援助 (SS)
    4. メンバーの個人的な問題の解決に力をかす
    9. メンバー間の摩擦をなくすように努める
    14. 地域活動以外の場でもメンバーの面倒をよくみる
    19. メンバーに信頼されるように努める
    24. メンバーとうちとけた関係を持つように努める
  - フィードバック (PF)
    5. 功績をあげたメンバーがいたら他のメンバーの前でほめる
    10. メンバーが特によい意見や活動をした時にはほめる
    15. よい活動や意見を出した時、それに応えるように心がける
    20. メンバーがよい活動をしたら、自分の喜びの気持ちを表わす
    25. ほめるべきところはほめる
- 

**表3 活動成果指標尺度の項目**

- 
- 人とのつながり
    1. 親しくつきあえる友人ができた
    6. 進んで外に出るようになった
    11. 人とのつながりを大切にするようになった
    16. 人との出会いが楽しくなった
    21. お互い声をかけあうようになった
    26. 友人を活動に誘うようになった
  - 地域社会への貢献
    2. 地域に溶け込めたと思うようになった
    7. 地域で活動のPRをするようになった
    12. 地域の人たちに感謝された
    17. 地域の課題がみえるようになった
    22. 地域の活動などに自発的に参加するようになった
  - 運営の活性化
    3. 人間関係が難しかった
    8. 組織の運営が難しかった
    13. 組織の理念や目的を共有できなかった
    18. 活動が義務的、形式になり、楽しくなくなった
    23. 人間関係などで活動に自信をなくした
  - 健康行動
    4. 健康のために運動するようになった
    9. 健康についての関心が高くなった
    14. 健康管理をしっかりするようになった
    19. 栄養のバランスなど食生活に気を配るようになった
    24. 睡眠や休養を十分とるようになった
  - 専門職・行政との関係
    5. 行政の援助が得られなかった
    10. 専門職の援助が得られなかった
    15. 専門職との考え方の違いに気づいた
    20. 行政との考え方の違いに気づいた
    25. 行政からの理解が得られなかった
-

表4 第2回目で整理された活動上の問題点

第1位

- 訪問時の対応が時々不快な面が見受けられ感じが悪い
- 後継者問題
- 愛育班活動をして子ども達と顔見知りになり笑顔が出る
- 訪問カードが出せない(留守の家が多い)
- 訪問の際、留守が多い
- 閉鎖的な家庭が多い
- 子どもを集めるのに苦労している
- 後継者がいない

第2位

- 班員不足
- お年寄りに声かけすると大変喜んでいただける
- 班員不足
- 訪問カードを書いてくれる人が少ない
- 後継者がいない
- 留守が多くて訪問カードの提出ができない
- もう少し愛育班に協力してほしい

第3位

- 班員の悩み
- お付き合いのなかった仲間ができた
- 愛育班への関心度
- 班員さんの数はいるが、活動する人が少ない
- 活動する班員がいつも同じ
- 後継者問題について
- 訪問カードが出せない

表5 第3回目の解決策検討のテーマ

- 1) 班員のなり手いない(後継者問題)
- 2) 訪問カードが出せない
- 3) 地域の人に理解されない(協力してくれない)
- 4) 活動する班員が決まっている

表6 期待するリーダー行動得点(平均値)の比較

	A市愛育班(2007)		食改(1998)			保健協力員(1996)			愛育班員(1991)		
	平均値	標準偏差	平均値	標準偏差	t検定	平均値	標準偏差	t検定	平均値	標準偏差	t検定
TI	2.870	1.689	4.099	1.087	***	3.889	1.499	*	4.324	1.063	***
DB	3.217	1.413	4.014	1.130	**	3.333	1.610	n. s.	4.397	1.017	***
AB	0.500	0.745	0.979	1.151	**	1.037	1.427	n. s.	0.912	1.011	*
SS	3.500	1.264	3.535	1.253	n. s.	3.815	1.248	n. s.	3.882	1.17	n. s.
PF	4.283	1.346	4.310	1.192	n. s.	3.778	1.286	n. s.	4.412	0.974	n. s.
標本数	46		142			27			68		

\*:p<.05 \*\* :p<.01 \*\*\*:p<.001

表7 活動成果指標尺度得点(5項目)

活動成果指標	標本数	平均点数	標準偏差	【参考】指標作成時(5点換算)
人とのつながり	56	4.143	1.156	2.755
地域社会への貢献	56	3.196	1.529	1.930
運営の活性化	56	0.893	0.958	0.553
健康行動	56	3.107	1.578	2.624
専門職・行政との関係	56	0.786	0.977	0.678

表8 活動成果指標尺度得点の比較

活動成果指標	項目数	今回の点数			尺度作成時の点数			t検定
		標本数	平均点数	標準偏差	標本数	平均点数	標準偏差	
人とのつながり	5	56	4.143	1.156	678	2.755	1.880	***
地域社会への貢献	3	56	1.911	1.057	678	1.158	1.132	***
運営の活性化	4	56	0.786	0.839	678	0.442	0.772	*
健康行動	5	56	3.107	1.578	678	2.624	1.789	**
専門職・行政との関係	3	56	0.375	0.643	678	0.407	0.687	n. s.

\*:p<.05 \*\* :p<.01 \*\*\*:p<.001

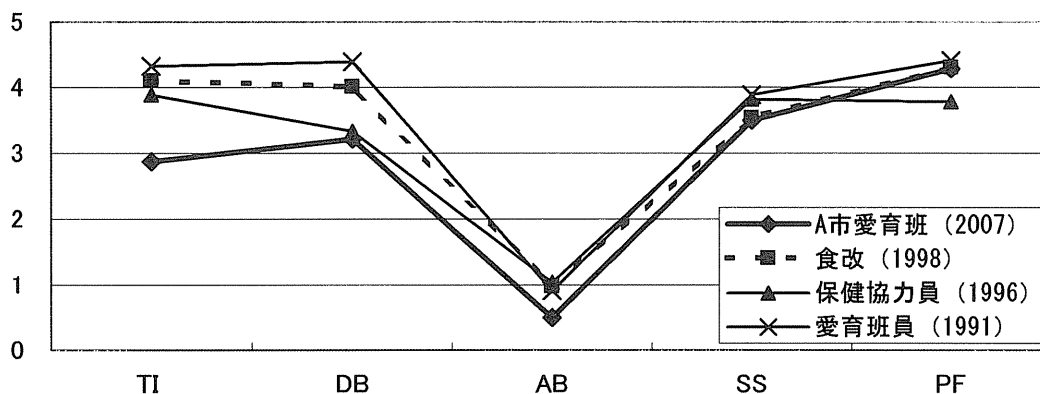


図1 期待するリーダー行動の比較

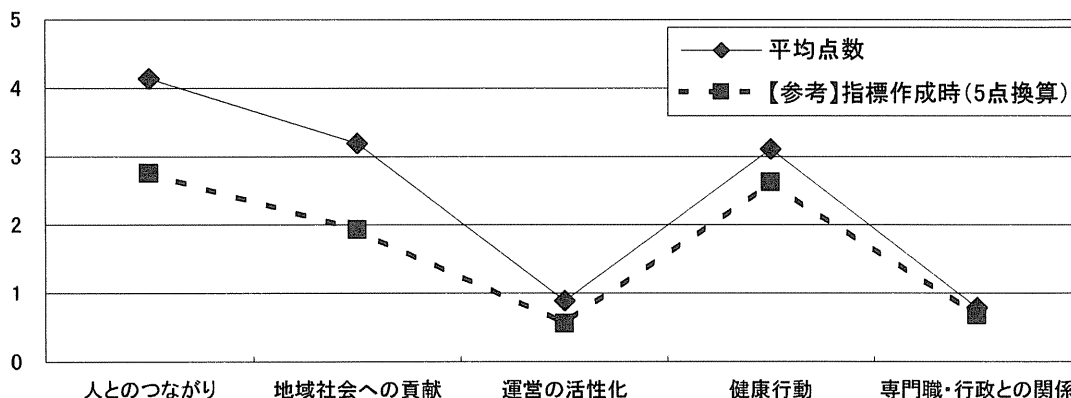


図2 活動成果指標尺度得点に比較